

中経

論壇

NPOクラブ
支援チーム
支那情報
広報

井上

真己子



イスラエルとイスラム組織ハマスの停戦が成立したが、戦争の終結には程遠い。生存していた人質がハマスから解放され、家族と喜びの再会もあった。しかしガザ地区では、瓦礫の中で途方に暮れる男性が「家族も殺され、家も破壊され、これから一体どうすればいいのか」と言っていた。非難の応酬も攻撃も止まない。停戦成立の前、NHKが報じたイスラエル市民の声を聞いて驚いた。連日報道されるガザ地区の筆舌に尽くし難い

惨状に、イスラエル市民もさぞ心を痛め、複雑な心境だろうと勝手に思っていたところ、取材されたイスラエルの女性が「ガザの状況には関心がない」と冷たく言い放ったのだ。世論調査もそれを裏付け、67%の人が、ガザの住民の飢餓や苦痛に悩んでいないという。イスラエルでは、政府寄りの報道機関は、人質解放とハマス撲滅に向かって戦う政府軍をたたえ、戦争継続を正当化する。政府に批判的な報道機関も、ガザの悲惨さを伝える報道はしにくいという。それは同胞を失った読者の心情に沿わないものだから

独立した報道の重要性

だ。戦争の片方の当事者としてはそうなのだろうが、報道の影響力を思い知らされる。私たちにも思っていることがあつた。戦前戦中の大本営発表だ。政府に異を唱える声は押しつぶされ、国は、勇ましい精神論で無謀な戦争に一気に突き進んだ。

折しも、自由と平和を享受する日本では、初の女性総理が誕生した。首相指名まで、公明党の連立離脱、野党共闘の可能性など、目まぐるしい展開があつた。超保守といわれる高市総理には、期待と危惧、両方の強い眼差しが向けられている。そうした中で、大事なものは「健全な言論空間」

丁寧な考察がなされている。当時の政治システムやメディアの役割に触れ、「満州事変のあたりから報道は積極的な戦争支持に変わり」「多くの国民は幻惑され、ナシヨナリズムはさらに高まった」と述べている。

「談話」でないのが腑(ふ)に落ちないのが、石破前総理らしい、考え抜かれた言葉で、日本はなぜあの戦争を避けることができなかったのか

の堅持であることを忘れてはならない。世界は、米国をはじめヨーロッパでも、保守系ポピュリズムが台頭する。今ほど報道の力が必要とされない。独立した報道と活発な議論の場が確保され、将来にわたって強靱な民主主義が守られなければならない。今を生きる私たちの責任である。

将来にわたる民主主義堅持のために

議論の場が確保され、将来にわたって強靱な民主主義が守られなければならない。今を生きる私たちの責任である。